

復活節第5主日 (ヨハネ 14:1-12)

わたしを通らなければ、だれも



「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない。」 (14・6) 4月29日(木)、奈留小教区設立百周年の感謝のミサと祝賀会が無事執り行われました。主司式は中村倫明大司教様で、説教を古巣馨神父様が務めてくださいました。全体を奈留の主任神父様が見渡して、立派に務めを果たしているなあと感じました。

百年の道、百年続いた真理、百年受け継がれた命。奈留教会の生き字引とも言える葛島マシさんが、中村大司教様から功労賞を渡されました。御年104歳だそうです。小教区百年を最初からずっと見守ってきました。イエスの道を生きて体験し、それが真理であると理解し、ここに命がありますと証した一人です。こういう「生き字引」のような人は、小教区の歴史にそう何人も現れないでしょう。

ただどの小教区にも、その「生き字引」のような人がいました。私が通ってきた浦上教会・滑石教会・太田尾教会・馬込教会・浜串教会・田平教会。それぞれの教会で「この人が教会とともにずっと生きてきたんだなあ」という人がいました。まあここまで言うと勘の良い皆さんは次に何を尋ねるかお分かりでしょう。福江教会には教会の「生き字引」のような人がいるのでしょうか。浜脇教会・井持浦教会には「生き字引」と言える人がいるのでしょうか。そしてその人が証ししたことを受け継いでいる人がいるのでしょうか、ということですね。

「生きる辞書」はたくさんいなくても良いのです。みことばに裏打ちされた人生を全うした人が一人でもその教会にいれば、その教会には「道であるイエス」を体現した人がいることになります。イエスの時代にだけでなく、みことばに生かされて、今の時代にも生き方で「道あるイエス」をよみがえらせる人がいることになります。

復活祭は毎年やってきます。しかしそれぞれの教会に何も起こさない復活祭は、復活祭なのではないでしょうか。最近そのように思います。私たち司祭の側にも責任がありますが、実は教会の生き字引と言えるような人がいるのに、教会の表舞台から引っ込んでしまっていて、いろいろ事情があって出てこれない。言い方はきついですけど弾き飛ばされている。もしそういう人がいるなら、死んだような状態から復活させて、持っているものをもう一度教会のために差し出してもらえないものでしょうか。

「わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない。」イエス様を通るといいますが、イエス様のどのような場面を通ることを指すのでしょうか。私はどの場面を通ったとしても、父のもとに行く道なのだと考えています。私自身の経験から、一つの教会では勢いがある、イエス様の華々しい活躍の場面を歩かせてもらった気がしますが、一つの教会では十字架の道を歩かされ、苦しいイエスの場面に重ねてもらいました。どの場面を通っても、父のもとに行く道でした。た

だあえて言うと、十字架の道に重ねてもらった時代が、父のもとに行く道の真ん中を歩いたと感じています。

毎年の復活祭。私たちの教会家族に、この教会を語れる人で、今は死んだように息を潜めているけれども、復活してこの教会の見える屋台骨になってくれる人が一人でもいいので、現れてくれたらと願います。その年、復活祭は大きな喜びとなるでしょう。きっと、この教会の屋台骨になる能力を持ちながら、今の教会からは距離を置き、息を潜めている人がいるはずです。

私たちはその人を見つけ出してこなければなりません。たとえ数年かかろうと。一人見つけてこなければ、いかに大きな教会であっても将来は明るくありません。百匹のうちの見失った一匹。あるいは千匹のうちの見失った一匹。いつ探すのですか？今ですよ。

話は逸れるかもしれませんが、羊飼いが羊を一匹見失ったとき、あるいはドラクメ銀貨を十枚持っている女性がその一枚を無くしたとき、その無くしたものをどこで見つけるのか、誰にも分かりません。見当がつくなら、ふだんの忘れ物とたいして変わりません。あちこち探して、あるいはともし火をつけ、家を掃き、見つけるまで探します。どこで見つけるのか、全然わからない。

きっとそれは、自分の通ってきた道をイエスが先に通られた道であったと気付かずにずっと何年も何十年も通ってきたようなものです。

「わたしは道であり、真理であり、命である」と仰ったことはこれだったのか。本人は全然わからずに耐えていた。それでも、それが「命への道」であったと理解できるようにイエスはその道を共に歩いてくださったのです。

「主よ、わたしたちに御父をお示してください」と叫んでいるそばで、イエスはいつも御父を示しておられる。今年の復活節に見つけ出すべき人はどこかにいて、きっと見つかります。その人はすでに、「道であるイエス」を歩いてきた人だからです。

復活節第6主日(ヨハネ 14:1-12)